国際交流への尽力

昭和に入り、日米関係が悪化してきたことに心を痛めていた栄一に、「人形による国際交流で日米友好を図りたい」という依頼がアメリカから届きました。栄一は外務省などと連携して、「日本国際児童親善会」を組織し、アメリカ側から 12,739 体の「青い目の人形」を受け入れました。この人形は、全国各地の小学校に送られ、大歓迎を受けました。のちに、返礼として 58 体の日本人形がアメリカに送られています。

現在、「青い目の人形」は、埼玉県内の小学校などに 12 体（全国で 270 体余）保存されています。また、栄一は、第 18 代アメリカ大統領グラント、救世軍ウィリアム・ブース、中国の政治指導者孫文など、世界の著名人とも親交がありました。

アメリカから贈られた「青い目の人形」を手にする栄一【渋沢史料館所蔵】

【栄一が過ごした飛鳥山】

1877（明治 10）年、栄一は飛鳥山に 4,000 坪の土地を購入すると、清水組（現・清水建設株式会社）に敷地造成や母屋および付属家の建築を依頼して、1879（明治 12）年に飛鳥山邸が完成します。

それまでに栄一は何度か住まいを変えていました。1873（明治 6）年の時には、第一国立銀行を設立し、兜町の行内に住んで仕事に没頭しました。1876（明治 9）年には、第一国立銀行を設計した清水組の 2 代目・喜助に設計施工を依頼し、深川福住町に居を構えています。飛鳥山での土地購入が深川福住町邸の新築と 1 年しか違わないのは、栄一は当初、飛鳥山邸を別荘（接客接待の場）として考えていたからです。敷地内には、日本館と物置などの付属家、門、塀、庭園などが整備されていました。

そんな栄一は、明治 21（1888）年に兜町に洋風家屋を新築し、再び移り住みます。川岸に面しており、イタリアのベニスをイメージした煉瓦造り二階建ての豪華な建物でした。この建築物は、のちに栄一が飛鳥山に本邸を移したあと、渋沢事務所として使用されています。

曖依村荘内インドの詩人タゴールと栄一【渋沢史料館所蔵】

1901（明治 34）年に栄一は兜町を離れ、以降 30 年、没するまで飛鳥山邸を本邸とします。大規模な増改築を経て、最終的には 8,470 坪余り。増築された日本館に加え、西洋館、茶室「無心庵」、土蔵、倉庫、車庫等を設けたこの広大な邸宅は、「曖依村荘」と呼ばれ、内外の賓客を招くゲストハウスとして頻繁に使用されました。欧米ではゲストを私邸に招く習わしがありますが、当時の日本にそのような場所は少なかったのです。第 18 代アメリカ大統領を務めたグラントをはじめ、アジア人初のノーベル文学賞受賞者であるインドの詩人タゴール、中華民国総統蒋介石、救世軍大将ブラムウェル・ブース、フランスの銀行家アルベール・カーン等、政財界人、学者、文化人まで、飛鳥山を訪れた著名人を挙げればきりがありません。国内でも、政治家、実業家、文化人の招待はもとより、重要な会議の場として、あるいは地域住民との親睦を深めるための園遊会会場としても使用されました。栄一はこの私邸で、毎朝様々な来訪者に会っていました。世界中から来訪者を歓待し、生涯をかけて友好親善に尽くしました。飛鳥山邸は、民間外交に大きな役割を果たした舞台でもあったのです。

晩香廬は、現在深谷市に移築された誠之堂と同じく、喜寿のお祝いとして清水組が栄一に贈った建物です。来賓をもてなすため、栄一が好んで使ったと伝わります。また、八十歳の誕生日と、男爵から子爵への昇格を祝い、竜門社が栄一に贈った鉄筋コンクリート造り平屋建ての建物は、青淵文庫と呼ばれています。ステンドグラスやタイル等の美しい装飾が施されています。誠之堂、晩香廬、青淵文庫は、それぞれ異なる建築方法を用いた田辺の傑作であり、この三棟が飛鳥山旧渋沢邸と栄一生誕の地の深谷に保存されていることは大変意義深いことです。

晩香廬【渋沢史料館所蔵】

青淵文庫【渋沢史料館所蔵】